

「サッカーは人と人をつなぐ存在」

「楽しみ、
生きがいを与えられる人になる」



J1リーグ・ジュビロ磐田 運営会社に入社

サッカー一部マネジャー 鈴木愛理さん(商4)

Airl.S

卒業の日を迎えたサッカー部マネジャーの鈴木愛理さん(商4)は4月から、サッカーJ1リーグ・ジュビロ磐田の運営会社「株式会社ジュビロ」(静岡県磐田市)に入社する。「Jリーグのチームで働きたい」と強く心に決めたのは1年前、大学3年生の3月にJ2のクラブで体験した1週間のインターンがきっかけだった。

「サポーター、選手、ホームタウン、スポンサー企業など、ジュビロに関わる全ての人の立場で考え、行動し、クラブとクラブに関わる人たちの“価値”を高めることに力を注ぎたい。楽しみや生きがいを与えられる人になりたい」。そんな目標、夢を描き、社会人として一步を踏み出す。

父は元日本代表、 兄はJリーガー 「サッカー一家」に育つ

父の康仁さんが元日本代表ゴールキーパー、兄2人もサッカー経験があり、次兄の雄斗さん

はJ1・湘南ベルマーレ所属の現役Jリーガーという「サッカー一家」に育った。「生まれたときからサッカーが身近な存在」という環境で、父や兄に連れられて行ったサッカー場が幼い頃の遊び場だった。

ただ、身近な存在ではあったが、幼少期はサッカーに興味がなかった。その後、サッカー部マネジャーを務めた中学・高校時代に、「サッカーというスポーツは人と人をつなぐ存在。感情を共有し、同じ目的に向かうことができ



鈴木愛理さん

すずき・あいり。神奈川県・関東学院高卒、商学部4年。中学・高校時代はサッカー部の活動以外に、外部のスクールに通ってダンスに打ち込み、コンテストやイベント出場の経験もある。趣味はダンスと料理、愛犬とゆっくり過ごすこと。好きな言葉は、心が動く様を表す「感^{うご}く」。サッカー部公式ブログにその理由が記されている。



サッカー部公式ブログ

る素晴らしい力を持っている」と学び、高校3年の頃に将来の仕事としてサッカーに関わることを意識するようになる。

興味がなかったのに中学・高校でマネジャーになった経緯を不思議に思って尋ねると、中学校でどの部活動に入るかを悩んでいたときに相談した担任教諭がサッカー部顧問で、「マネジャーを募集している」と勧められたからだという。サッカーとの縁にどこまでも恵まれていると思わざるを得ないエピソードだ。

肌身に感じた「スポーツの力」

スポーツの力を目の当たりにした経験もある。中学3年の時に病気で亡くなった祖父は、雄斗さんの試合をいつも楽しみにしていたという。余命わずかと言われていたことを知った雄斗さんが6試合連続でゴールを決めると、見違えるほど元気を取り戻し、それから1年以上も生きることができた。鈴木さんは「サッカーは人に生きがいや幸せをもたらす。その魅力を多くの人に感じてもらい、

私も楽しみや生きがいを与えられる人になりたい」と思うようになった。

2023年3月にインターンを体験したJ2・水戸ホーリーホックでは、水戸市の本拠地スタジアムなどでカメラ撮影や取材、SNSでの情報発信といった広報の仕事を中心に担当した。実は、水戸は次兄の雄斗さんが2012～2015年に在籍したチームでもあった。

X(旧ツイッター)で、かつて所属した雄斗選手の妹をインターン生として受け入れていると紹介されると、サポーターから歓迎す

▼関東1部リーグ残留を決め、喜ぶサッカー部員たち(右から2人目が鈴木愛理さん) = 2023年12月2日、千葉県浦安市のプリオベッカ浦安競技場





関東1部リーグ残留に部員の笑顔が弾けた=2023年12月2日▲

るリプライが多く寄せられた。重い病気を患っている高齢の男性からは「水戸のゲームを見るのが生きがい」という言葉を直接聞いた。

Jチームでインターン、仕事にやりがい

「ずいぶん前に在籍した兄のことを今も応援してくれていた。チームやサポーターの方々から、とても温かみを感じ、仕事にやりがいを覚えた」

「選手に近い場所で働きたい」と希望し、ほかにもJクラブの公式サイトを運営する企業や、サッカーの分野に強みを持つ広告代理店などを就職先に考えていたが、インターン経験が決め手となり、これ以後は「Jリーグのクラブ一本で就活に臨む」と決意した。

そして、この頃、ジュビロのサイトで社員公募が始まっていることを知った。迷わず応募し、採用面接では、「中大サッカー部でさ

まざまな立場になって考える大切さを学んだ。それをもとに考えて、行動し、サポーターや選手、スポンサー企業などクラブに関わる全ての人たちのニーズに合った新しい切り口で、クラブに付加価値を与えたい。人々に楽しみを創りだしたい」などと熱く訴えた。クラブ（ジュビロ）の新卒採用者は少ないという。

関東1部リーグ残留に胸ドキドキ

「総理大臣杯」出場へ、一体となった応援

サッカー部ではマネジャーの役割とともに、Jリーグクラブのフロント制にならぬ、営業や企画、広報を業務とする「事業本部」に所属した。SNSやYouTubeで部活動の情報を発信したり、オリジナルグッズを作製・販売したり、地域の店舗や幼稚園・小学校との関係づくり、地域の清掃への参加な

ど、さまざまな活動に取り組んだ。こうした活動や地域とのかかわりを礎に、ホームゲームでは集客目標を定めた。試合前には子供たちが参加できるミニゲームも開催し、好評だった。

マネジャー、アナリスト（分析担当者）といったチームや選手を支えるスタッフは、一歩下がった存在と見られがちだが、サッカー部は違う。副主将を務めた佐藤悠平選手（商4）をはじめ同期の選手が「マネジャーも選手も同じだから」と、繰り返し声をかけてくれた。この言葉に後押しされた鈴木さんは、「プレーしないから見えるものもある。マネジャーだからと遠慮することなく、私のポジションだからこそ感じたことを伝えられた」と仲間感謝する。

忘れられない試合の記憶がある。2023年12月2日、関東1部リーグ残留を懸けた山梨学院大とのプレーオフ。「絶対残留できる。どうせならスリルあるこの状

況を楽しもう」と心に余裕を持って臨んだはずが、勝利のホイッスルを聞くと、心臓の鼓動が速くなり、目に涙があふれてきた。想像以上にプレッシャーを感じていた自分に気づき、1部残留という結果を後輩たちに残せた安堵感を覚えたという。



**「良いクラブ」
「温かいクラブ」
「すごいクラブ」
地域に根差した異色の
コラボレーションも**

「第47回総理大臣杯全日本大

学サッカートーナメント大会」への出場を決めた2023年6月の関東大学サッカートーナメント大会（アミノバイタルカップ）の筑波大戦は、PK戦にもつれる劇的な展開となった。応援の部員らと一体となって声援を送り、勝利の瞬間は全員がピッチ内に走り出してい

た。鈴木さんは「気持ちで勝った試合」とたどえている。

部活動を軸に、この4年間で学んだことは、「人と人のつながり」「さまざまな立場で考えること」のそれぞれの大切さだ。ジュビロ磐田でも、「良いクラブだな」「温かいクラブだな」「すごいク

2023年度チームスローガン「LOVE中央」 「おれはホントに中大が大好きだから…」



2023年度のサッカー部スローガン「LOVE中央」は、「中央大学を愛し、中央大学のために闘い、行動する」という意味が込められている。マネジャーの鈴木愛理さんによると、ミーティングを重ねて決まったスローガンで、発案したのは加納直樹選手（総合政策4）。チームが代替わりした後の3年生当時の冬のミーティングで、加納選手が「おれはホントに中大が大好きだから、ホントLOVE中央なんだ」と熱い思いを口にし、異論なく決定したという。

鈴木さんは「負けが続いても前を向けるチームにしたいという思いも込められている」と話す。同じ4年生のチームメイトには「一緒に過ごした4年間はかけがえのない宝物。楽しかった時間、もがき苦しんだ時間を糧にしてお互いに頑張ろう」とメッセージを送っている。

■2023年度 関東大学サッカーリーグ1部成績

順位	勝点	得失点差
① 筑波大	52	32
② 東京国際大	43	11
③ 明治大	38	22
④ 日本大	37	15
⑤ 流通経済大	36	-1
⑥ 東洋大	30	2
⑦ 桐蔭横浜大	28	3
⑧ 東海大	23	-7
⑨ 国土館大	20	-9
⑩ 中央大	19	-13
⑪ 拓殖大	17	-36
⑫ 法政大	14	-19

※中大はプレーオフで2部の山梨学院大に勝ち、来季の1部残留が決定

ラブだな」と、クラブに関わる人や、サポーターら情報を受け取る側の人とその周囲にいる人たちに感じてもらえるような環境を作っていくつもりだ。地域に根差した企業や団体などとの異色のコラボレーションを企画したいという。

中大に進学したのは「部員の意識も高く、環境も高いレベルにあるサッカー部でマネジャーをした

い。入学前の見学でアットホームな雰囲気にひかれた」からという。もう一つ、商学部にはスポーツビジネスに関する授業があるのも理由だった。オープンキャンパスで授業を受講し、担当の渡辺岳夫教授（サッカー部マネジメントアドバイザー）に「商学部に進学できるよう頑張ります」とすぐにメールを送った。

幼少期に関心がなかったサッカーにこんなにも関わるようになるとは思わなかったと振り返った鈴木さん。「家族でサッカーを通じた活動ができていることに幸せを感じます」と続け、卒業の今になって「私たち家族をつないでいたものがサッカーだったことが改めて分かった」と話している。



☆卒業するサッカー部 4 年生（カッコ内はポジション）

青木奏人 (DF)	有田恵人 (MF)	猪越優惟 (GK)	兎本瑛洋 (DF)	牛澤健 (DF)
太田尚弥 (FW)	小川峰和 (FW)	影山兼三 (DF)	勝田泰智 (FW)	加納直樹 (DF)
北原康太 (MF)	熊谷悠里 (FW)	栗山且椰 (FW)	齊名翔太 (MF)	坂本康汰 (MF)
佐藤悠平 (MF)	鈴木大樹 (FW)	鈴木悠矢 (GK)	高木慎太郎 (FW)	武田洸 (FW)
田尻優海 (MF)	田邊光平 (MF)	田村進馬 (DF)	野上弾 (MF)	橋本泰知 (FW)
松井竜豪 (MF)	南出涼太 (DF)	矢尾板岳斗 (FW)	山下陽希 (MF)	山本航生 (FW)
山崎希一 (MF)	吉田圭汰 (MF)	芳山詩恩 (MF)		
吉川七海 (運営・広報)	熊川将太郎 (事業本部)		澤村美裕 (学生トレーナー)	
鈴木愛理 (マネジャー)	高橋一誠 (学生コーチ)		持田温紀 (事業本部)	

編集後記

チームの原点を担う「0人目の選手」

学生記者 近藤陽太 (経済3)

2023年5月6日、アジアチャンピオンズリーグ (ACL) の浦和レッズ対アルヒラル (サウジアラビア) の決勝第2戦 (埼玉スタジアム2002) を観戦するため、私は15年ぶりにサッカー場に赴いた。

ところで、私は根っからの野球ファンだ。特段、サッカーが“苦手”なわけではなかったが、いつも足を運ぶのは野球場だった。友人に誘われた観戦だが、ACL決勝ゆえにチケット代はかなりの高額で、渋々感があったことも否めなかった。

しかし、スタジアムに足を踏み入れた瞬間、そんな若干の後悔は吹き飛んだ。スタジアムを埋め尽くす真っ赤なユニフォームとフラッグ、世界を目指す浦和レッズを国際線の飛行機に模したコレオグラフィー (手にした紙などでつくる人文字)、そして日本一アツイといわれる浦和サポーターのチャント。繰り広げられる華麗なドリブルやパスプレー、キーパーのスーパーセーブに心が躍った。

「サッカーってなんて面白いんだ!」。素直にそう思った。このあと私の地元の名古屋グランパスの試合に足を運んだ。今では、ワンルームの壁にグランパスと中日ドラゴンズのユニフォームが並んで飾ってある。

サッカー部マネジャーの鈴木愛理さんは4月から、私が魅了されたサッカーの世界に飛び込む。プレーし、皆に応援されるのは選手だ。しかし、その舞台を用意し、万全の状態をサポートするのはチームスタッフである。

「サポーターは12人目の選手」という言葉をよく耳にする。そうであれば、「チームスタッフは0人目の選手」だ。チームの“原点”を担うスタッフとして、Jリーグのチームに進む5人のチームメイトとともに大きく羽ばたいてほしい。



▲(左から) 猪越優惟選手、田邊光平選手、牛澤健選手、山崎希一選手、有田恵人選手

サッカー部 卒業生の5選手が「チーム入り」

サッカー部は2023年12月22日、多摩キャンパスで記者会見を開き、Jリーグのチームに所属が内定した選手5人を発表した。有田恵人選手(文4)がベガルタ仙台、猪越優惟選手(商4)が清水エスパルス、牛澤健選手(経済4)と山崎希一選手(経済4)は水戸ホーリーホック、田邊光平選手(法4)がレノファ山口FCにそれぞれ所属することが決まった。

「FOREST GATEWAY CHUO」3階ホールで行われた会見には、5選手と宮沢正史監督、加納樹里部長が出席し、マネジャーの鈴木愛理さん(商4)が司会進行役を務めた。

5人は記者の質問に堂々と答え、プロの世界に挑戦する決意を次々と語った。宮沢監督は「中央大学はすごいと思われるような選手になってほしい」と期待感を表し、加納部長はことわざの「疾風に勁草を知る」を紹介し、逆境でこそ人は成長できるとはなむけの言葉を送った。

プロ入りする5人の決意表明、意気込み、抱負は次の通り。それぞれの結び部分の漢字は「大学4年間で漢字1文字で表してほしい」という質問への回答。カッコ内はポジション、身長・体重。

☆有田恵人選手(MF 171センチ・63キロ)

「(Jチーム入りは)率直にうれしい。家族も泣いて喜んでくれた。お世話になった人に感謝を伝えたい。ベガルタ仙台は伝統があり、サポーターの熱量が高いというイメージがある。自分の特長を発揮して、愛される選手になりたい。今年はけがが多く、苦しかった中で、サッカーができる幸せに気付くことができた」

「時」=暇な時間に何ができるかを考えるようになった。

☆猪越優惟選手(GK 185センチ・80キロ)

「夢だったサッカー選手になることができて率直にうれしい。J2のエスパルスを自分がJ1に上げる気持ちでプレーしたいです。家族から送られた『謙虚におごらず高みを目指しなさい』という言葉を実践し、将来は海外でプレーし、日本代表として活躍したい」

「見」=先輩を見て、マネして成長した。見る力を養えた。

☆牛澤健選手(DF 178センチ・72キロ)

「アピールポイントは堅い守りと後ろからゲームを作れるところ。水戸は若い選手が多く、成長できる環境というイメージがある。1年目からリーダーシップを発揮して、チームの中心の

選手になりたい。4年間、勝てない時期も多かったが、これからの人生につながると思います」

「肩」=筋トレでみるみる肩が大きくなる部員を見て、継続する大切さを知った。

☆田邊光平選手(MF 168.5センチ・61キロ)

「1年目が重要だと思うので、きょうから体を作りたい。レノファ山口にはサッカースタイルの面で共感を覚えます。得点やアシストでチームに貢献したい。高卒でプロに行けなかったことはつらかったが、中大でOBやプロ選手との出会いにも恵まれ、4年間で成長できた」

「楽」=サッカー教室で子供たちと触れ合う中で、サッカーを楽しむ気持ちを思い出した。

☆山崎希一選手(MF 165センチ・58キロ)

「(J内定に)母は泣いて喜んでくれた。水戸は若い選手が多く、社会貢献に力を入れている印象がある。サッカー選手としてだけでなく、人としても成長したい。けがで試合に出られない日も続いたが、その中で得た経験もある。1年目から試合に出て活躍し、身近な人に活力と希望を与えられる選手になりたい」

「楽」=苦しくなったとき、力を抜いてプレーできるようになった。

激流で丸みを帯びた石のごとく…

会見を通して感じたのは温かい雰囲気だった。

部活動の仲間は一生涯のものだ。同じ目標に向かい、時にぶつかり合いながら生活する。会見で苦しいことが多い4年間だったという話が多く聞かれた。おそらく、彼らは苦しんだ分、ぶつかることも多かっただろう。私には、会見の雰囲気が激流を下り、ぶつかり合い丸みを帯びた石のごとく穏やかに感じられた。

5人はこの春からそれぞれのチームに羽ばたいていく。海外への挑戦や日本代表への憧れを口にしている選手もいた。大活躍して夢を叶えてほしい。そして、現役生活を終えたあとは、ぜひ母校に戻ってきてほしい。OBの元日本代表、中村憲剛さんが彼らを教えたように、「中大ファミリー」として伝統を紡いでいくことを期待している。

(学生記者 近藤陽太)

「特攻と中央大学」 研究

命の尊さ、平和を考える



鵜野飛行場跡の平和祈念の碑▲

松野良一国際情報学部教授の
FLP ジャーナリズムプログラム・ゼミ

戦火に散った 中大出身の特攻隊員の軌跡を調査

FLP ジャーナリズムプログラム松野良一ゼミの学生たちが、第二次世界大戦末期の日本軍の特攻作戦で亡くなった中央大学出身の先輩たちの軌跡を丹念に調査し、長く記憶にとどめようというプロジェクト「特攻と中央大学—記憶を後世に—」に取り組んでいる。学徒出陣から80年目にあたる2023年の10月、學員(卒業生)が特攻隊員として飛び立った兵庫県加西市の^{うずらの}鶉野飛行場跡で慰霊式が開催された。ゼミ生たちは式典後に研究発表を行い、特攻に至るまでの年月を日記に残したある特攻隊員の思いに迫るドキュメンタリー映像を上映した。



ゼミ生の佐藤ちひろさん

世界各地で武力紛争、戦争が絶えない現状にあって、FLPゼミでの研究は、ゼミ生自身にとっても、平和や命の尊さを考える拠りどころとなっている。ドキュメンタリー映像の制作で監督(ディレクター)を務めた伊藤光雪さん(国際情報学部4年)と、研究発表を担当した佐藤ちひろさん(総合政策学部3年)に研究のことや、学びの意義などを尋ねた。

特攻志願の卒業生 大岩虎吉少尉を慰霊

2023年10月14日の慰霊式と、鶉野飛行場跡にある戦史を伝えるミュージアム「soraかさい」などの

見学会の後、ゼミ生の佐藤ちひろさんは、日頃の研究の概要を発表した。1943年の学徒出陣(それ以前の繰り上げ卒業を含む)に伴い、特攻で58人、戦艦大和の関連など「準特攻」で6人の計64人の中大

学徒が戦死したこと、中央大学學員戦没者名簿と特攻隊に関する現存する資料をもとに手作業で照合を進めるといった調査方法や、生徒たちの生きた軌跡を調査し、掘り起こし、次代へ記録として残す意

◇^{うずらの}鶉野飛行場

1943年に開設。所在地は兵庫県加西市鶉野町。加西市ホームページによると、パイロット養成のために設置された旧日本海軍の練習航空隊の飛行場。正式名称は「姫路海軍航空隊」で、地元では鶉野飛行場と呼ばれている。飛行場南西部にあった航空機製作工場、第二次世界大戦終戦まで「紫電」「紫電改」など500機余の戦闘機が組み立てられ、試験飛行が行われたという。飛行場跡に、戦史を伝えるミュージアム「soraかさい」や、特攻隊員の遺書などを公開している資料館、防空壕などがあり、戦争の歴史を伝え残し、平和の学びの場として活用されている。

味など、プロジェクトの概要を説明した。戦争や戦争体験に関する調査・研究は、歴代のゼミ生が2006年から続けているという。

慰霊式では、鷓野飛行場から飛び立ち、戦死した特攻隊員の名を刻んだ碑を前に、参列した中央大学の大村雅彦理事長、近畿ブロックの白門会の学員ら約50人が献花して黙祷をささげた。

碑に刻まれた氏名の中に、卒業生の大岩虎吉少尉の名があった。愛知県出身の大岩少尉は、中大在学中に高等文官試験司法科（現在の司法試験に相当）に合格したものの、戦況悪化に伴って1943年に繰り上げ卒業。海軍予備学生（13期）を経て、教官を務めていた。1945年4月6日、第1護皇白鷺隊はくろの一員として鷓野飛行場を飛び立ち、最後は鹿兒島くしら県の串良基地から97式艦上攻撃機で出撃し、沖縄方面にて戦死している。

変わらぬ思い 「大切な人の命を守りたい」

「なぜ取材したいのですか」。ゼミ生の佐藤さんは、大岩少尉の遺族の問いかけに言葉が詰まり、はっきりと答えられなかった。その後、手紙でやり取りをしてプロジェクトの趣旨を説明し、最終的に対面で話を聞くことができた。丁寧に取材に応じてくれた遺族の思いに感謝するとともに、大切な話を聞いた証しとして今後、書籍や映像に残したいと考えている。

大岩少尉が特攻を志願した心情について、佐藤さんは、鷓野飛行



慰霊式の後、ゼミ生の研究発表が行われた＝2023年10月14日▲

場の調査を30年以上行ってきた研究の第一人者、上谷昭夫さんから「妻や義父に残した手紙には、家族を大切に思う気持ちが書かれている」と聞いた。

「特攻に志願した大岩少尉の心の奥には、家族ら大切な人の命を守りたいという思いがあった。時代が変わっても、同じように私たちも胸に思っていることです。大岩少尉の人生を伝えることで平和といわれる今の時代のもろさと、尊さを私は伝えたい」。取材を経た今ではそんな思いが佐藤さんの胸に残っているという。

遺族と面会するまでの道のり

ゼミ生の伊藤光雪さんが監督を務めた「南西諸島の空から—ある特攻隊員の日記—」（40分）は、1945年4月6日に沖縄戦の陸軍第一次航空隊総攻撃で特攻隊員とし

て戦死した富澤健児少尉の生涯に迫ったドキュメンタリー映像だ。

映像の中で伊藤さんは、中央大学学員戦没者名簿と特攻隊の全容をまとめた「特別攻撃隊全史」を照合するなどし、「わかったのは事実関係だけ。どういう少年時代を送り、どのような学生だったか、どういう思いで出撃したかを（遺族に）聞けないだろうかと考えました」と言葉を継いだ。

この後、富澤少尉の遺族を探し始め、出身の東京都墨田区向島の電話帳で苗字を頼りに電話をかけたが所在は判明せず、現地を訪問すると弟が亡くなっていた。このとき、遺族を知る近所の人が見つかり、その紹介で2021年10月2日に、おいの富澤利章さんと小澤正名さん、めいの渡辺聡美さんに話を聞くことができた。

富澤少尉のケースに限らず、調査にあたるゼミ生は遺族に会えたり、話を聞けたりするまでが困難で、

たとえ面会できても詳細な話を知らない人も多い。その意味で、遺族との面会を収録したドキュメンタリー映像が完成したのは奇跡ともいえる。

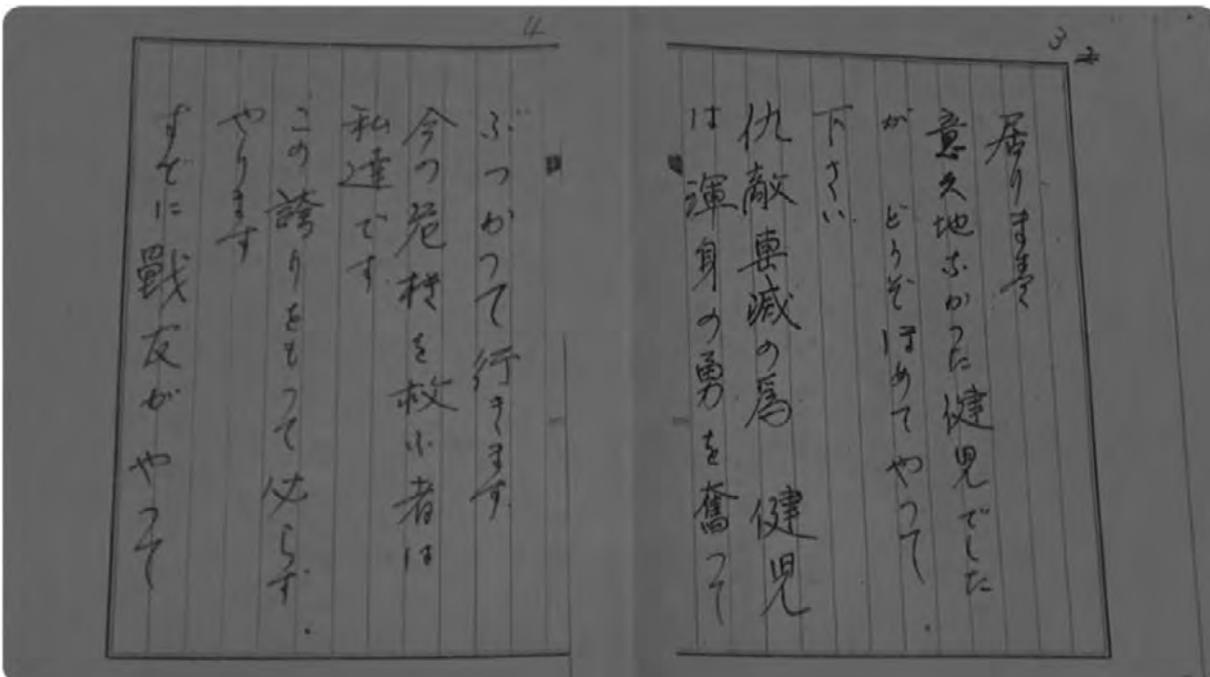
12冊の日記…先輩の 生きた証しを残したい

伊藤さんは3人を取材して「温和で優しく成績優秀だった」という富澤少尉の人柄に触れ、保管されて

いたノート12冊の日記を託された。以後、1941年の元日から始まる日記を精読したほか、防衛省防衛研究所や国立公文書館の史資料を読んで確認するなど、ドキュメンタリーの制作作業に没頭した。映像



富澤健児少尉①と、万世特攻平和祈念館に残る遺書②（ドキュメンタリー映像「南西諸島の空から—ある特攻隊員の日記—」より）





(写真右から) 富澤健児少尉の思い出の富澤利章さんと小澤正名さん、めいの渡辺聡美さん、ゼミ生の伊藤光雪さん＝2021年10月2日▲

の一部はアメリカ国立公文書館から提供を受けた。

「日記を読むと、特攻で亡くなった先輩が、今の私たちと何ら変わらない学生だったことがわかります」。学生生活や、英語の試験など学修に関する記述などからそう痛感した。

ドキュメンタリーのタイトルにも名付けた通り、遺族から日記を託されたことが映像制作を強く後押しした。平和な時代を生きる中央大学の後輩として、先輩の特攻隊員の生きた証しを残したいという思いは調査・研究と、制作の原動力と

なった。

遺族の思い「何を言っても足りないと思う」

完成したドキュメンタリー映像のDVDをおいの富澤利章さんに手渡すと、「家宝にする。おじ(富澤少尉)も喜んでいるはずですよ」と感謝されたという。ただ、伊藤さんは、「昔のことを知る戦争体験者が亡くなり、少なくなってきた。戦争の取材は今やらないとできなくなる。遺族が遺品を手放したら調査もできなくなるかもしれない」と危

機感も覚えている。卒業後は報道記者として働く予定で、今回の映像制作で記者の仕事の意義、やりがい的一端を感じ取った。

インタビューの最後で、いま富澤少尉にかける言葉を尋ねられた富澤利章さんは「おつかれさまとしか言いようがないかな。何を言っても足りないと思うよね」と息をついたきり、言葉を継げなくなった。

「感謝したくても、感謝していいのかという思いもあるのではないかな。遺族の思いはこの一言に詰まっている」。伊藤さんはそう感じたという。

ドキュメンタリー映像 「南西諸島の空から—ある特攻隊員の日記—」

東京都墨田区向島出身の富澤健児少尉は1941年4月に中央大学に入学。戦況悪化のため1943年9月に専門部商科夜間部を繰り上げ卒業し、翌月に特別操縦見習士官1期生として採用された。1945年2月、転属先の下志津飛行隊（千葉）で特攻の編成準備が下令され、自身の特攻作戦への参加を知ることになる。同年3月の米軍の慶良間諸島上陸を受け、4月6日に特攻隊第62振武隊として出撃した沖縄戦で、23歳の若さで亡くなった。

ドキュメンタリー映像は、富澤少尉が残したノート12冊分の日記、めいとおいの遺族3人への取材映像、出撃した鹿児島県南さつま市の万世飛行場跡に立つ万世特攻平和祈念館の語り部と、南九州市の知覧特攻平和会館の学芸員による特攻隊や特別操縦見習士官に関する解説の映像、万世特攻平和祈念館に残る遺書などで構成されている。

日本軍が最後に造った飛行場となった万世飛行場は1945年3月から4カ月間だけ使用され、17歳前後の少年飛行兵を含む201人の若者が出撃。このうち121人が特攻隊員だった。



万世特攻平和祈念館の語り部、小屋敷茂さん（左）を取材する伊藤光雪さんらゼミ生▲



▲ドキュメンタリー映像の監督を務めた伊藤光雪さん



◀ YouTube
ドキュメンタリー映像
「南西諸島の空から—ある特攻隊員の日記—」

〈協力〉

富澤利章 小澤正名 渡辺聡美 知覧特攻平和会館
万世特攻平和祈念館 防衛省防衛研究所

〈資料提供〉

アジア歴史資料センター アメリカ国立公文書館
万世特攻平和祈念館 中央大学広報室大学史資料課

〈制作プロデューサー〉

伊藤光雪 藤川なな帆 杉村千依 山崎滉大

〈監修〉

松野良一

〈制作補〉

坂爪悠莉 渡邊美咲 鶴飼健司

〈語り〉

伊藤光雪 吉田遥希 杉山浩規

〈ディレクター〉

伊藤光雪

〈制作・著作〉

中央大学 FLP 松野良一ゼミ

（敬称略）